

第1章 クリオージョ、インディオ、メスティーソ — 現代ペルーの人種・民族関係理解のための予備的考察 —

キーワード：クリオージョ、インディオ、メスティーソ、多文化主義、民族間関係

後 藤 雄 介*

Criollo, Indio and Mestizo :

A Preliminary Study to Understand Ethnic Relations in Contemporary Peru

Key Words : criollo, indio, mestizo, multiculturalism, race relations

GOTO Yusuke

Peru was originally a country with a large indigenous population, but its racial and ethnic formation has become more and more complex. Today it can be said that Peruvian society and culture are of “mixed-blood”, like many other Latin American countries.

There exists a common understanding in Latin America that racial democratization has been realized thanks to the “mestizaje” (mixed-blood nature) of this area. But we must say that the reality is far from this ideal.

While it is true that in Peruvian race relations the “color line” is very ambiguous under the “mestizaje”, conflicts between white and non-white peoples persist. Social stratification is determined by class relations, but it cannot be sufficient to only cite economic factors to explain why specific groups are placed at the bottom of society. Historical representations attributed to race will also be problematized. That is to say ; we must analyze how race relations have been fixed and essentialized by the force of representations in order to exclude or appropriate some groups, and examine what is necessary to resist that kind of force.

In this paper I pick up three historical categories for my analysis : “criollo” in the era of the Peruvian-Bolivian Confederation (1835 – 39) when “criollo nationalism” was consolidated for the first time ; “indio”, represented by both “indigenismo” and “hispanismo”, which were the major ideological trends of the 1920 – 30s ; and “mestizo” and his source of empowerment under the “multiculturalism” of contemporary Latin America.

* 早稲田大学教育・総合科学学術院

はじめに

- | | |
|--|-----------------------------------|
| I. クリオージョ・ナショナリズムの生成、
あるいはインディオの排除 | III. メスティーソのアイデンティティと
エンパワーメント |
| II. インディオの領有—インディオヘニスモ
とイスパニスモの親和性— | むすびに代えて |

はじめに

本章の目的は、現代ペルーの人種・民族関係を理解するひとつの手がかりとして、人種・民族をめぐるいくつかの歴史的トピックを取り上げ、クリオージョ (criollo)、インディオ (indio)、メスティーソ (mestizo) の3つのカテゴリーを規定する表象が孕んでいる問題を批判的に検討するところにある。

ペルーは多数のインディオ (先住民) 系人口を擁し、かつ多人種・多民族からなる国であるが、いわゆる「混血」の進行にともなって社会構成上の複雑さはさらに増しつつある。ラテンアメリカ諸国にある程度共通する国はあるいは社会通念として、混血によって人種・民族的平等化が実現している、もしくは実現しつつあるとしばしばいわれているが、残念ながら、現実はそのような理想とはかけ離れているといわざるをえない。首都リマを例にとれば、路上の物売りなどのインフォーマルセクターの多くはインディオ系と混血のメスティーソ系の人々であり、都市周辺部の貧しい居住区に住まうのももっぱら彼らである。一方で、明らかに白人系の人々しかアクセスできないビジネスや瀟洒な空間が確実に存在している。

人種・民族格差の証左として、「ペルー日本大使公邸占拠事件」¹⁾時に届けられた映像の数々は示唆的であった。公邸内で人質となったのは、この場合もちろん日本人・日系人も多かったのであるが、ペルー国内の有力者と他国の外交官からなる白人系が中心の、総じて「白い」世界に属する人々であった。一方、事件を引き起

1) 本論からは外れるが、事件の最中、日本では、なぜこのような事態を招いたのかという、ペルーの歴史社会的背景を問う真摯な態度はむしろ脇に追いやられ、もっぱら同様の事件が生じた場合を想定した、日本にとつての「危機管理」論がメディアを席卷していた。今日、当時の「危機管理」論者たち (山内昌之、佐々淳行、福田和也、など) は彼らなりに事件を教訓としているのだろうが、舞台がペルーであったことはもともと露ほどの意味も持っていなかったにちがいない。それが証拠に、彼らが「侍」と呼んで賞賛してやまなかったアルベルト・フジモリが、任期半ばで大統領の職を放棄して日本に留まり続けているという、彼らのいわく「侍らしからぬ」状況にあるにもかかわらず (2003年1月時点)、フジモリを批判しているとは寡聞にして知らない。

こしたMRTA（トゥバク・アマル革命運動）の部隊を構成していたのは、リーダー格をやや別にすれば、インディオ系・メスティーソ系の特徴の濃い、貧しい地方出身の若者であった。ここでさらに注目すべきは、「白い」人質を救出すべくMRTAを包囲していたペルー軍の末端兵士である。じつは彼らの多くもまたインディオ系・メスティーソ系にはほかならなかった。軍内部の「白い」世界は、現場映像には出てこない上層部エリートに限られるだろう。MRTAの部隊と軍の末端兵士は大使公邸の外壁を隔てて対峙していたはずであるにもかかわらず、実際には、「白い」世界から排除された同類であったということも可能である。

このように、ペルーの人種・民族関係は混血によってその境界線(color line)が曖昧になっているとされているにもかかわらず、白人対非白人の構図は確実に存在し続けているといえる²⁾。社会階層は階級によっても規定されるが、なぜ特定の人種・民族が底辺に組み入れられているのかについては経済的な説明だけでは不十分であり、人種・民族に対して歴史的に付与されてきた表象もまた問われなければならない。表象の力によっていかにして人種・民族関係は固定化・本質化され、特定の人種・民族が排除または領有の対象となるのか、また、そうした表象の力に抗するためにはなにが求められているのかを考察することが、本章での具体的な課題となる。

まず第I節では、クリオージョをめぐる表象を取り上げる。本章ではクリオージョを白人系一般に対応するカテゴリーととりあえず位置づけている³⁾。ラテンアメリカ諸国の独立を主導したのはクリオージョであったが、彼らが独立後にインディオを排除したナショナリズムを立ち上げる過程が検討の対象である。

続いて第II節では、インディオをめぐる表象を取り上げる。インディオの擁護・復権に関しては1920-30年代の「インディヘニスマ(indigenismo)」の動向が注目されてきたが、一方で「イスマニスマ(hispanismo)」と呼ばれる潮流が同様にインディオを表象してきたことはもっと強調されてよい。インディヘニスマとイスマ

2) 英語圏では白人の対立項として「有色人種(colored)」の語がしばしば用いられる。白人以外を総じて非白人としようが「有色人種」としようが二項対立の単純さの誹りは免れないが、「有色人種」を白人の対立項とすることがより問題なのは、あたかも白人とは無色透明の普遍的な存在であり、「有色人種」が「有徴(marked)」な存在として常にそのアイデンティティが厳しく問われるのに対して、「無徴(unmarked)」の位置をあらかじめ無前提に確保することができてしまう点である。しかし、そもそも、「白」もまた「色」でなくていったいなんであろう。

3) しかしながら、クリオージョは本来多義的な表象である。形容詞として、“la comida criolla”のように各国の「郷土料理」の名称として誇らしげに定着している一方で、たとえばペルーでは、“a la criolla”(「いい加減なやり方で」の意)のようにどこか自虐的な用いられ方さえする[Álvarez Vita 1990: 154]。

ニスモの関係は、もっぱら差異が強調されるが、国民統合のためにインディオを領有するその言説のあり方において、じつは両者には共通性があったことが知られなければならない。

そして第Ⅲ節では、メスティーソをめぐる表象を取り上げる。本章ではラテンアメリカにおけるメスティーソについての表象を総じて「メスティサヘ (mestizaje)」と呼ぶことにする。メスティサヘの解釈をめぐるには2つの相異なる解釈がありうるが、ここではラテンアメリカ諸国の最近の社会的・思想的動向を踏まえ、メスティーソのアイデンティティとエンパワーメントの在処を探る。

I. クリオージョ・ナショナリズムの生成、 あるいはインディオの排除

一九世紀前半に生じたラテンアメリカ独立の主体が、スペイン系を中心とするアメリカ大陸生まれの白人、すなわちクリオージョであったことはよく知られている。

ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』は、植民地時代にペニンスラール (peninsular。スペイン本国生まれのスペイン人) によって不当に差別されてきた「不条理」を、「アメリカ大陸で生まれた者が真のスペイン人になれるはずはないとするならば、スペインで生まれたペニンスラールが真のアメリカ人になれるはずもない」と価値転倒させたクリオージョの心性に注目し、原初的なナショナリズムを欠いて成立したラテンアメリカの独立こそ、近代ナショナリズムの起源であるとしたのだった [Anderson 1993 : xiii, 47-65]。以来、今日に至るまで、ラテンアメリカ諸国においてナショナリズムの支配的部分を構成しているのは、基本的にはクリオージョの政治文化であるといっても過言ではないだろう。

しかしながら、クリオージョもまた、もともと「真のアメリカ人」(真のペルー人、真のアルゼンチン人、真のメキシコ人、など) だったわけではない。「われわれはヨーロッパ人でもなければ先住民でもなく、先住民とスペイン人の中間の種族 (especie media) である」と述べたのはラテンアメリカ独立の英雄シモン・ボリーバルであったが [Bolívar 1993 : 443]、そもそも独立の理念は、このようにクリオージョとインディオとの連携に基礎を置くはずであった。しかしながら、実際のナショナリズム構築はインディオを排除する形でおこなわれ、結果として、クリオージョが事実上「真のアメリカ人」となったのであった。これが「クリオージョ・ナ

シヨナリズム」と呼ばれるものである。以下では、このクリオージョ・ナシヨナリズムについて示唆に富んだ議論を展開しているセシリア・メンデスの書を検討してみよう。

ペルーにおけるクリオージョ・ナシヨナリズムの成立背景についてメンデスが注目しているのは、「ペルー・ボリビア連合」の形成とその崩壊の過程である。独立後のペルーではカウデージョ (caudillo) と呼ばれる地方ボス同士が抗争する群雄割拠の時代が続いたが、当時ボリビア大統領であったアンドレス・デ・サンタクルス・カラウマーナ (Andrés de Santa Cruz Calaumana, 1792-1865) は混乱に乗じてペルーに進軍し、その結果、ペルー・ボリビア連合 (1835-1839) を成立させた。この連合の目的は、植民地時代に両地域を結んでいた旧商業ルートを再開し、大西洋岸との自由貿易を促進するところにあった。連合はペルー南部地域では歓迎されたが、太平洋経由の取り引きと密接に結びついていたリマの商業エリートの反発を買った。こうしたリマのエリート層を代表し、ペルー・ボリビア連合およびサンタクルスその人の批判の急先鋒に立ったのが、風刺詩人のフェリペ・パルド・イ・アリアガ (Felipe Pardo y Aliaga, 1806-1868) であった [Méndez 1993 : 14]。

メンデスはパルドによる批判を、「人種主義的感情が共和国創立以来もっとも鮮明に表出」し、「なにが『ペルーの国民的なもの (nacional-peruano)』でなにがそうでないかについての概念が形づくられた決定的瞬間」であるとし、ここに「サンタクルスによって象徴的に代表されるインディオの排除と蔑視に基づくペルーの国民的なものの定義」がなされるのを見て取った [Méndez 1993 : 14-15]。サンタクルスはボリビアのラパス生まれでそもそもペルー人ではなかったが、問題とされたのはそのことよりもむしろ、第二姓であるカラウマーナが示すように、彼の母がインディオの出自であるということだった。つまり、「サンタクルスはボリビア人であるからというよりもインディオであるからという理由でより外国人だった」のである [Méndez 1993 : 15]。

メンデスはまた、インディオ的なものを蔑むパルドの反サンタクルスの言説が、他方ではインカ帝国に言及することでそのナシヨナリズムの正統性を訴えている点を指摘している [Méndez 1993 : 18]。これは、死せるインディオの文化遺産を同時代を生きるインディオと結びつけてとらえることをあえてしない、今日にも及ぶインディオ問題をめぐる思考のパラドクスの起源であるといえるだろう。

メンデスの指摘でさらに興味深いのは、パルドが「いかなるインディオも侮蔑しているのではなく、とりわけ、『その』持ち場 (“su” lugar)」を離れたインディオ

を侮蔑している」点である [Méndez 1993 : 30]。サンタクルスの場合、彼が本来とどまっているべき場所であるボリビアを越え出てリマにまで及んできたことが問題なのであった。

このことは、二〇世紀半ば以降に本格化したアンデス農村から都市、とりわけリマへの人口移動が、クリオージョによってどう受容されたかを考えるうえでも示唆に富む。彼らにとって、アンデスからの移民はまさしく「クリオージョ・ナショナリズム」の危機であって、否定的な反応を引き起こしたことはないまでもない。たとえば、マリオ・バルガス・ジョサ (Mario Vargas Llosa, 1936 -) の小説『ラ・カテドラルでの対話』(1969) の冒頭部分で、変わり果てたりマの街をさまよいながら発せられるブルジョア階級出身の主人公サバリータ (サンティアゴ・サバリータが本名) のアイロニカルなつぶやきは、クリオージョにとっての喪失感を見事にいい表している。

サンティアゴは「ラ・クロニカ」社 [サバリータの務める新聞—引用者注、以下同様] の入口から不興げにタクナ通りを眺めやる。自動車、色褪せた不揃いな建物、霧のなかに浮かぶネオンサインの骸骨、灰色の正午。ペルーはどの時点で駄目になってしまったのだろうか？ ウィルソン [通り] のところの信号でとまっている車のあいだを、新聞売り子たちが夕刊と呼ばわりながら右往左往している。サンティアゴはコルメーナ通りの方に向かってゆっくりと歩き出す。両手をポケットに突っこみ頭をうなだれながら、やはりプラサ・サン・マルティン [広場] の方に向かう歩行者たちに囲まれながら進んで行く。彼はペルーみたいだった、彼、サバリータは、どこかの時点で駄目になってしまっていた。彼は考える、何のことを？ クリジョン・ホテルの正面で一匹の犬が彼の足をなめにくる、狂犬病をうつすなよ、あっちに行け。ペルーはすっかり駄目になってしまった、…誰も彼もみんな駄目になってしまった。彼は考える、解決の途はない、と。…

…誰もができるだけのことをしてペルーから身を守らなければならないのだから [バルガス＝ジョサ 1979 : 5, 6]。

しかしながら、ここで留意しなければならないのは、クリオージョが損なわれていると感じているもののほとんどが、きわめて特権的な領域に属していたということである。ペルーはけっして「駄目になってしまった」のではない。彼らの領分であったものを、「『その』持ち場」を離れた人々と分かつことが必要になったのであ

る⁴⁾。ゆえにクリオージョに対しては、みずからの既得権の自明性を疑い、新たに参与してくる社会層をいかに承認しうるかが問われることになるが、この点は第Ⅲ節で深めてみたい。

Ⅱ. インディオの領有 —インディヘニスモとイスパニスモの親和性—

インディオの置かれた社会的・文化的状況を把握しその擁護・復権を求める一連の動きは、政治社会運動から文学芸術創造に至るまで、「インディヘニスモ」と総称されてきた⁵⁾。

しかしながら、インディオを語りの対象としてきたのは、もちろんインディヘニスモだけではない。以下、インディヘニスモとの対比で取り上げるのは「イスパニスモ」のインディオに関する言説である。イスパニスモは「スペイン伝統主義」とでも訳せ、インディヘニスモのおよそ対極に位置する思想と通常は理解されている⁶⁾。しかし、両者の言説を子細に検討すれば、ある側面において大きな共通点があることがわかるだろう。この点は、インディオについて語る主体をもっぱらインディヘニスモに限ってしまい、その他の潮流の分析を疎かにすることで、これまで見えなくなっていたことは否めない。たとえば、次の引用を見てみよう。

民の大部分が住まう場所、国民性の揺籃の地、人々の生活に欠かせない脊柱にして、熱き土地を二つに分かつ幹であるシエラ [アンデス山間部] は、ありとあらゆる地理的・歴史的的理由により、ペルーの主たる地域でなければならない。その衰退した現状は国の中枢器官もまた衰退していることを明らかに意味する。…
…シエラ農業の改善および増大がないかぎり、厳密な意味での祖国は物質的にも精神的にもありえないだろう。ここにこそ、インディオ問題、すなわちペルーの本質的問題が存する。

まるでインディヘニスタ (indigenista、インディヘニスモの論客・主張者) かと見紛う内容であるが、じつはこれはホセ・デ・ラ・リーバ・アグエロ (José de la

4) クリオージョの喪失感を批判的に検討するこの論点は、未公開の拙稿 [1997] で触れている。

5) インディヘニスモの歴史に関する最近の成果としてファーヴル [2002] がある。

6) インディヘニスモとイスパニスモの二分法的理解は、たとえばイナミネ&山脇 [1995: 72] に見ることができる。

Riva Agüero, 1885-1944) の『ペルーの風景』からの引用である [Riva Agüero 1955: 186-187]。リーバ・アグエロはイスパニスタ (hispanista、イスパニスモの論客・主張者) の最右翼に位置づけられ、晩年はファシズムに傾斜していったことが知られている⁷⁾。彼のファシスト的側面は当然批判されるべきであるが、それは本章の検討事項ではない。むしろここで問題にしたいのは、リーバ・アグエロがイスパニスタもしくはファシストであることを理由に、そのインディオに関する言説が十分に検討されてこなかったことである⁸⁾。たとえば、リーバ・アグエロと、こちらはインディヘニスタの最左派とされるルイス・E・バルカルセル (Luis E. Valcárcel, 1891-1987) の言説を比較してみると、われわれはそこに奇妙な親和性があるのに気づかされることになる。

バルカルセルとリーバ・アグエロの二人がともに取り上げている歴史的トピックに、インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ (Inca Garcilaso de la Vega, 1539-1616) の人物像がある。周知のとおり、ガルシラーソはスペイン人征服者とインカの王女のあいだに生まれ、『インカ皇統記』(1609-1617) を著したクロニスタ (cronista、年代記者) である。彼の存在は、スペインとインディオの要素を兼ね備えた、いわばペルーの象徴であるといえる。ペルーは1921年に独立百周年を迎えたが、それと相前後する形で、ガルシラーソの死後三百年 (1916) および生誕四百年 (1939) の記念行事が配置されることとなった。リーバ・アグエロは前者で、そしてバルカルセルは後者で、それぞれ記念講演をしたのであるが、二人がどのようにガルシラーソを位置づけているかを見よう。

彼[ガルシラーソ]の書物のなかで脈打ち、胸も引き裂かれんばかりの悲劇(スペインによる征服)の勃発で潰えたのは…、ペルー的感情の本質、すなわち、先住民の暮らしの独自のリズムであり、格調高い牧歌生活の雰囲気であった。…ガルシラーソにあっては故郷と母方への愛が絶対にして圧倒するほど支配的であった。…

7) リーバ・アグエロのファシズム思想を手際よく知るには López Soria, ed. [1981] を参照されたい。

8) 小倉英敬は「リバ=アグエロが先住民の擁護者で、アンデス地域にペルーの将来を見ていたことは疑いない」と記しており [小倉 2002: 41]、リーバ・アグエロによるインディオへの注目を指摘している点で評価できる。小倉の書には予断や憶測とおぼしき記述も多々見られるが (とりわけ第三部第一章「ペルーの『国民』概念」において)、ペルー思想史研究にとって重要な貢献であることはまちがいない。

…インカ・ガルシラーソはペルー文学におけるもっとも完全な代表にして、もっとも明白な顕現であった。征服後に生を受けたクスコ出身のメスティーソで、「ペルー性 (peruanismo)」を形づくる精神のアマルガムの最初にして最良の例である彼… [Riva Agüero 1962 : 49, 57]。

彼 [ガルシラーソ] は自らをメスティーソであると認めている。「なぜなら私は両民族の資質を持っており、それらは私の長所にも短所にも参与することを余儀なくされている」と、彼は書く。「それもこれも、私の父は征服者でかつ同時にかの地 [ペルー] の住民であり、母はかの地の生まれであり、私はといえば二人のあいだに生まれ育てられたことによる」。…しかしながら、彼が母から受けついでインディオの感情の力は強く、それは彼のなかに染み渡っている。侵略者のあいだの悲劇的な戦いを語るときでさえも、インディオ的な雰囲気描写を包み込んでいる。…

…ガルシラーソについてはその独創性・信憑性・正確性が否定されてはいるが、彼の精神の本質的にして永遠の部分であるインディオの感情、およびペルー性 (peruanidad) の力強い根源を知らない者はいない [Valcárcel 1939 : 25, 26]。

両者ともガルシラーソのメスティーソ性に言及しているが、その評価については温度差がある。バルカルセルはメスティーソを否定する極端なインディオヘニスタと知られているとおり⁹⁾、ガルシラーソの実質はメスティーソではないと述べているに等しい。バルカルセルが強調しているのはもちろんガルシラーソのインディオ性であるが、ところが、リーバ・アグエロが強調しているのも同じくガルシラーソのインディオ性である。バルカルセルは別の箇所でもリーバ・アグエロの記念講演を引用し、「あろうことかリーバ・アグエロでさえ『ガルシラーソにあっては故郷と母方への愛が絶対にして圧倒するほど支配的であった』と驚きのあまり叫んだ」ことに触れ [Valcárcel 1939 : 25]、その意外さを表明している。

しかしながら、真の問題は、リーバ・アグエロとバルカルセルがインディオ性の強調において共通していることではない。むしろ、ペルー性の強調においてこそ二人に親和性があることである。つまり、ペルーの国民統合のイデオロギーである点でインディオヘニスムとイスパニスムは軌を一にする側面があるのである。両者のあ

9) バルカルセルの反メスティーソ的傾向については拙稿 [1996] を参照されたい。

いだに力点の置き所のちがいはもちろんのことながら存在するが、ペルー国民の創生に向けてはインディオ性であれメスティーソ性であれ（あるいは、スペイン性であれ）、いずれであれ領有せざるをえないことに、ここでは注意を促したい。

フェルナンド・フエンサリーダは、「わが国の知的エリートのメンタリティにとって、『人種』問題は国民化のプロセスの認識と密接に結びついているが、その認識のなかでこの問題は根本的に挫折したのものとして現れている。この挫折を熟考した知識人にとっては、インディオ的なものも、メスティーソ的なものも、スペイン的なものも、いずれも問題含みであった」と述べ [Fuenzalida 1975: 12]、ペルーにおいて国民化を構想するにはいずれのカテゴリーであれ、それ単独では不十分であることをまさに指摘している。

本章はここまで、ペルーの人種問題において「いずれも問題含み」とされるもののうちクリオージョとインディオを扱ってきたが、以下では、残るもうひとつのカテゴリーであるメスティーソの検討に入っていこう。

Ⅲ. メスティーソのアイデンティティとエンパワーメント

「はじめに」のなかで述べたように、本章ではラテンアメリカにおけるメスティーソについての表象を総じて「メスティサヘ」と呼んでいる。メスティサヘは、人種混淆に留まらず、文化の混血性を表す概念ともなっている。

文化が「混血する」ないし「混血的である」ということの解釈をめぐるのは、相異なる二つの立場が存在する。すなわち、今日のポストコロニアル思潮下においては、単一的支配文化の虚構性を脱構築するための方途とみなして称揚する傾向がある。たとえば、フランス語圏カリブ海地域を発信源とした「クレオール (creole)」への注目がそれにあたる¹⁰⁾。しかしながら、ラテンアメリカの歴史的コンテクストを重視する立場からは逆に、各国の多文化的状況をやがては単一の国民文化へと統合させるイデオロギーとして機能してきた点が強調される。メキシコのホセ・バスコンセロス (José Vasconcelos, 1882-1959) の唱えた「宇宙的人種 (raza cósmica)」やブラジルのジルベルト・フレイレ (Gilberto Freyre, 1900-1987) が称揚した「人種民主主義」が批判的にとらえられるのは、そのような文脈においてである¹¹⁾。

10) 「クレオール」についてはさしあたり、ベルナベほか [1997]、シャモワゾー&コンフィアン [1995]、複数文化研究会編 [1998]、今福 [1991] 等を参照されたい。

11) バスコンセロスの思想については青木 [1994] を、フレイレについては鈴木 [1993] を、それぞれ参照されたい。

筆者はこうしたメスティサへをめぐる解釈の相克についてはすでに論じたことがあり、「クレオール」的解釈の方向性についても評価するものである〔後藤 1998；2001〕。しかしながら、ここでは、統合イデオロギーとしてのメスティサへを維持してきたラテンアメリカ諸国の昨今の変容と「多文化主義 (multiculturalism)」との関係を鈴木茂と辻内鏡人に則して整理し、そのうえで、メスティーソのアイデンティティとエンパワーメントのあり方を考えてみたい。

鈴木茂は、「近年のラテンアメリカにおいて『人種』や『民族』、あるいは『国民像』のとらえ方にある変化が起こりつつある」ことを指摘し、それを「黒人や先住民によって『人種』や『民族』が政治的、社会的な問題として意識されるようになってきた一方、国家が、国民の多人種的、多民族的構成を認め、黒人や先住民の文化の独自性と発展を保証する、多文化主義的な原理を公式に表明するようになってきた」という2つの相補的な動きととらえ〔鈴木 1999a：41〕、両者をそれぞれ「人種の政治化」と「官製多文化主義」と呼んでいる〔鈴木 1999b：49〕。

鈴木によれば、ブラジルにおける「人種の政治化」は1988年の奴隷制廃止百周年を契機に高まりを見せ、「従来のように黒人や黒人文化が、『混血国民』としてのブラジル人や『混血文化』としてのブラジル国民文化の形成に貢献した一要素としてではなく、あるいはそれから一歩進んで、現在を生きる黒人の存在や黒人文化の個性を正当に評価するよう求めて」おり、「社会経済的な人種格差を根本的に解決する手段として積極的な優遇政策、いわゆるアフーマティヴ・アクションの導入さえ主張されるようになって」いる〔鈴木 1999b：47, 48-49〕。一方、「官製多文化主義」については、1988年憲法が「『国家は民衆文化、土着民文化、アフリカ系ブラジル人文化、および国民の文明創造に参加したその他の諸集団の文化を保護する』(215条第1項)として、ブラジルの人や文化の多人種・多民族性を認め、その存続を保障することを謳っている」点を重視し、「単に『文化』の平等性を認め合うだけでなく、それが公共政策にも反映されているという意味で、多文化主義的性格を持つと言えるであろう」と述べている〔鈴木 1999b：49〕¹²⁾。

もっとも鈴木は、こうした変化をけっして称賛しているわけではない。「人種の政治化」に対しては、「ブラジルでは、アフーマティヴ・アクションという考え方そのものへの反発が強いほか、アメリカ合衆国のような明確な人種間の境界線が

12) 鈴木が紹介しているのはブラジル、コロンビア、エクアドルの「官製多文化主義」の事例だが、アンリ・ファーヴルによれば、「官製多文化主義」的な動きはラテンアメリカ全般に広がっているといえる〔ファーヴル 2002：147-153〕。

存在しないため、その対象となる人々を実際に特定することが困難であるという理由で、こうした政策の有効性を疑う向きもある」ことを、「官製多文化主義」に対しては、「従来のような同質化とは異なるかたちでの、新たな国民的アイデンティティの創造過程の始まりと受け取るのは、やや早計であるように思われる」ことをそれぞれ指摘し、「[混血化が進行しているがゆえに] ブラジル社会では人種概念そのものが無意味であるという考え方は間違いであると考えている」との留保を置きつつも、「別の意味で『曖昧な』人々の人種的・民族的帰属意識を考慮することなしに、この問題 [差別是正のための社会変革] を論じることはできないと考える」と結んでいる [鈴木 1999b : 50, 51]。ここでいう「『曖昧な』人々」こそ個別具体的なメスティーソの存在であり、問題となるのは、「人種の政治化」の枠組みから「官製多文化主義」の枠組みからはずれたところにある、メスティーソのアイデンティティとエンパワーメントの源泉の在処にほかならない。われわれはこの問題をどう考えればよいのだろうか。具体的な検討に入る前に、さらにここで、辻内鏡人の「多文化主義」理解に触れておこう。

現代米国の政治文化に拠りつつも、その枠をはるかに越えて、「多文化主義」をめぐる議論が持つ思想的意味を論じた辻内は、旧来の「文化多元主義 (cultural pluralism)」が「国民文化の下位文化として種々のエスニック集団の文化を承認し、それらの諸文化がすべてのアメリカ人にとって、統一を旨とする単一文化よりも民主的で、豊かな文化を形成するという考え」であるのに対し、「多文化主義」は「共通文化としての国民文化の存在を否定ないし相対化し、エスニック文化を第一義的文化とする考え」と位置づける [辻内 2001 : 25]。「エスニック文化を第一義的文化とする」といっても、辻内は排他的な自文化中心主義 (ethnocentrism) を念頭に置いているわけではない。「それをもって多文化とみなすならば、優れて現代的な問題として、何がこの言葉 [多文化主義] で表されているのか見えなくなる」ことは、当然ながら自覚されている [辻内 2001 : 1]。

辻内は、アフリカ中心主義者と一般にはみなされているモレフィ・アサンテの「中心的 (centric) というのは、排他的な概念ではなく、自己を自己の文化的準拠枠において理解すること」ということばを引用しつつ、「多文化主義」には「自己を独自の価値をもつ存在として確認し、他者からその承認を受けようとする思想的・心理的な動機があること」を指摘している [辻内 2001 : 8, 9]。ここからは、独自の準拠枠によって自己 (self) を肯定的に理解をするにあたって、他者による承認 (recognition) が不可欠であることがうかがえる。そして、辻内によれば、こう

した自己と他者の関係は対話 (dialogue) を通じて実現される。「自己意識は他者との関係のなかから形づくられるものである。アイデンティティの形成は、そのような他者との対話や抗争をとおして、相手の意識やイメージが自己の内に投影されるものであり、それを受容ないし拒絶するという対話的で闘争的な過程である」[辻内 2001 : 17]。

自己理解、他者による承認、対話という辻内の「多文化主義」理解の枠組みを受けて、あらためてメスティーソのアイデンティティとエンパワーメントの問題を考えると、われわれは第I節でも用いたバルガス・ジョサの『ラ・カテドラルでの対話』のなかに、ラテンアメリカの現実世界において生じうる、あるメスティーソの経験が描かれていることに気づかされる。

作品冒頭で、「クリオージョ・ナショナリズム」の危機意識からペルーの首都リマの変貌を嘆いていた主人公のサバリータであるが、物語の終盤においては、アナという女性と恋に落ち、やがて結婚に至るいきさつが綴られる。アナは「浅黒い肌」で、アンデス中部の地方都市である「ワンカーヨ出身」の父親（インディオの出自を思わせなくもない）と「ムラート [インディオと白人の混血]」の母親を持ち、「国立」の看護学校（ブルジョア階級ならば私立に通うであろう）を卒業後、「衛生病院で実習生」として働いている [バルガス＝ジョサ 1979 : 461, 464, 486, 503]。つまり、彼女は人種的にも階級的にも典型的なメスティーソ（スペイン語として正しくは、女性形である *mestiza*）であるといえる。

サバリータがアナと結ばれたことについて、ヨランダ・ウェストファーレンはサバリータの消極的選択と見ているが [Westphalen 2001 : 331]、個人同士の組み合わせとしては、現代ペルーにおいてはごくありふれた出来事というべきであろう。問題は、彼らに向けられる周囲のまなざしである。サバリータは家族に知らせないままアナと結婚したのだが、以下は、結婚後、彼が初めて家族にアナを紹介する場面である。

いいえ、あたしにはどうでもよくないのよ、サバリータ。家の呼鈴を鳴らすとき、あいつに腕をつかまれるのが分かった、あいつはあいている方の手で髪を押さえていた。馬鹿ばかしい、俺たちはここで何をしてるんだ、どうしてこんなテストを受けなけりゃならないんだ…。そこにテテ [サバリータの妹] の小さな眼があった、一分もするとチスパス [サバリータの兄] の小さな眼が、そして親父とおふくろの眼が、あいつを探し当て、穴のあくほど見つめ、まるで検視のよう

だった。…家族全員が居間に集まって、待ち受けていた。まるで法廷だったな、サバリータ。…十挺のライフル、彼は考える、それが一斉にアナに照準を合わせ、弾を放つのだ。彼は考える、おふくろの顔。お前はおふくろをよく知らなかったんだ、サバリータ、お前はおふくろがもっとしっかりしていて、世慣れ、自制心があると思っていた。だがおふくろは自分の困惑も驚きも幻滅も隠そうとはせず、終始怒りに燃えていた。二人の所へ来たのもおふくろが最後で、顔からは血の気が失せ、まるで鎖を引きずる苦行者のようだった。訳の判らぬことをぶつぶつ言いながらお前に口づけをし（唇がわななき、彼は考える、目を大きく見開いていた）それから無理をしてアナの方を振り向いた。あいつは腕を上げかけたが、おふくろはあいつを抱き締めもしなければ笑いかけることもしなかった。…

…「あの子がだれと結婚したか分からないの？」とソイラ夫人 [サバリータの母] は涙にむせんだ。「分からないの、分からないの？ どうして私に認められますか、息子が、女中にしてもいいような女と結婚したのを、どうやって見ろとおっしゃるの？」 [バルガス＝ジョサ 1979：502-503, 504]

バルガス・ジョサ特有の文体によって自在に切り替えられているが、「俺」も「彼」も「お前」もサバリータを指している。『ラ・カテドラルでの対話』にあっては、「サバリータだけが、問いかけ、評価をし、判断を下す認識主体として構築されている」 [Westphalen 2001：316]。彼の視点を通じて、ここでは他者（クリオージョ）のまなざしによって徹底的に切り刻まれ、承認も対話の機会も与えられず、自己を肯定的に理解することなどおおよびもつかないアナの姿が描かれている。この場面は、辻内もまた引用する [辻内 2001：108]、フランツ・ファノンが描写する黒人の苦悩を想起させる。

私はゆっくりと世界に登場する、躍り出ることは諦めきって。私は這って進む。すでに白人のまなざしが、それだけが真のまなざしである白人のまなざしが私を解剖する。私は凝視・染色 (fixer) [傍点原著] される。ミクロトームを調整して、白人のまなざしは私の実在の切断を客観的に行う。私は裏切られる。これらの白人のまなざしのうちに私は感じとり、見てとる。新しいひとりの人間が登場するのではなく、人間の新しいタイプ、新しい種族が現れるのであることを。ニグロというわけさ！ [ファノン 1998：136]

アナもまた、「新しいひとりの人間」としてではなく、「人間の新しいタイプ、新しい種族」として表象されたのであった。ファノンのひそみに習えば、それが「メスティーソというわけ」である。

しかしながら、上記場面にはアナの声がただひとつだけ含まれている。それが出だしの「いいえ、あたしにはどうでもよくないのよ、サバリータ」である。サバリータは確かにアナを結婚相手として選びとったのであるが、彼が向き合っているのはアナではなく、むしろ依然としてクリオージョの価値観である。作品冒頭で「駄目になってしまった」ペルーと自分を重ね合わせたように、アナが家族によって拒絶されたことによって、サバリータが損なわれていると感じているのはむしろ自分自身なのではないか。その意味で、「あたしにはどうでもよくないのよ」というアナの悲痛な叫びは、サバリータには必ずしも届いていない。この叫びを聞くことこそ、アナを承認し、対話関係に入り、彼女自身が自分を肯定的に理解できるきっかけとなるはずであるにもかかわらず、である。なるほど、権力関係が固定化されている支配者と被支配者の二者にあっては、対等な立場での承認も対話も存在しがたい。だからこそなお、強者が弱者の叫びを聞くべきであることが、一層切実なものとして要請されているといえる¹³⁾。

文学作品という素材を用いてメスティーソのアイデンティティとエンパワーメントの可能性（不可能性）を論じてきたが、現実世界を対象としていないことについて不満の向きもあるだろう。ひとつにはいまだ筆者の準備不足によるところが大きいといわざるをえないが、文学における意味生産を脱構築することもまた重要であると指摘しておきたい。ふたたびウェストファーレンのことは借りれば、「われわれの関心は、われわれの文学における数多のアナ、アイダ、アンブローシオ[いずれも『ラ・カテドラルでの対話』のなかの周縁的登場人物]、すなわち、われわれの創作批評世界において非在化され周辺かつ沈黙へと追いやられた人々の視線を交錯させるところにある」といえる [Westphalen 2001 : 334]。

13) 強者が弱者の叫びを聞くべきである——この実現困難な倫理的態度を、2001年9月11日の同時多発テロをきっかけにアフガニスタンを空爆し、今日（2003年1月時点）ではイラク侵攻が危惧されるなか、それでも米国に期待するほかに手だてがないというのが、われわれの時代の悲劇である。

むすびに代えて

本章はこれまでに、ペルーの人種・民族をめぐる歴史的表象に注目し、クリオージョ、インディオ、メスティーソの3カテゴリーについて不十分ながらも検討を加えてきた。

そのなかで、クリオージョについては、共和国独立以後、ペルーのナショナリズムの支配的部分を構成することになった起源をたどり、他者を排除することで確保されてきた既得権の自明性が今日では問われることになるという見通しも示した。インディオについては、インディヘニスマ、イスパニスマ双方から国民創生のために領有されてきたという事実に基づき、インディオのみならず、クリオージョ・メスティーソも含め、こうしたカテゴリーが「いずれも問題含み」、すなわち、それ自体では本来不全なものでありうることを示唆した。そしてメスティーソについては、鈴木茂と辻内鏡人の論に依拠しつつ、メスティーソが「曖昧」さを脱却するためには自己の肯定的理解と他者による承認が必要とされるが、両者を結ぶ対話が公正であるためには権力関係の克服が欠かせないとの課題もあらためて浮き彫りになった。

ペルーと米国の人種関係を比較検討したスザンヌ・オボレルは、ペルーにおいては人種問題が米国社会のように明確に問題化されないことに、むしろ別種の問題がひそんでいることを示唆している [Oboler 1996 : 25]。ペルーの人種・民族関係はその境界線が不明瞭で「いずれも問題含み」であるがゆえに、その「曖昧」さを利用することで差別が隠蔽かつ温存されてきたということができよう。

こうした抑圧に対して、他者から背負われ、みずからもまた背負う帰属カテゴリーのアイデンティティを鮮明化することで対抗運動を組織する本質主義的傾向が生じるのはいわば必然的な流れでもあるが、それでは問題の本質が最終的に解決されない、すなわち他者との対話的關係が築けないこともまた事実である。たとえば、ペルーについては昨今「チョーロ (cholo)」という大衆的なカテゴリーに注目し積極的な評価を与える傾向が日本でも見られるが [小倉 2000 : 181-186]、筆者にいわせれば、チョーロはいわばメスティーソの下位体系であり、しかもその本質化はチョーロ自身というよりもむしろ外部の識者がおこなっているに過ぎず、「『チョーロ』層が自らを『チョーロ』と自認することは稀である」とは、ほかならぬチョーロ概念提唱者自身の言である [小倉 1999 : 122]。

対話において権力関係の克服が不可欠であることは先に述べたが、とりわけ、支

配者の側への倫理的要請が大きくならざるをえないのが、この問題の最重要点として急所である。この点については、筆者がかねてより取り組んでいるペルーの作家にして人類学者であるホセ・マリーア・アルゲダス (José María Arguedas, 1911 - 1969) の思想、より具体的には、遺作『上の狐と下の狐』[Arguedas 1971] における「階層間コミュニケーションの可能性」の追求が深く関連してくると思われるが、その詳しい分析はまた別の機会に譲る¹⁴⁾。

辻内鏡人は「『人種』という言説からの出口はまだ見えない」と、かつてみずからの論考のひとつを結んだ [辻内 2002 : 127]。筆者もまたそうであるといわざるをえない。そうであるからこそ、また、志半ばにして世を去った辻内 (2000年12月に急逝) を継承するという意味でも、人種・民族関係への取り組みは引き続きなされなければならない。

[付記] 本章は早稲田大学2001年度特定課題研究助成費 (個人研究) による成果の一部でもある。

参考文献

- Álvarez Vita, Juan
1990 *Diccionario de peruanismos*. Lima : Librería Studium.
- Anderson, Benedict
1993 *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised Edition, New York : Verso.
- 青木利夫
1994 「メキシコにおける『混血』のイメージ—ホセ・バスコンセロスの『混血』思想の形成—」『イベロアメリカ研究』(上智大学イベロアメリカ研究所) 16 (2) : 61-74.
- Arguedas, José María
1971 *El zorro de arriba y el zorro de abajo*. Buenos Aires : Editorial Losada.
- ベルナベ、ジャン、パトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアン
1997 『クレオール礼賛』恒川邦夫訳 平凡社。
- Bolívar, Simón
1993 Discurso de Angostura (en la oración inaugural del Congreso de Angostura, reunido el 15 de febrero de 1819). In Leopoldo Zea, ed., *Fuentes de la cultura latinoamericana*. Vol.1. México, D.F. : FCE (Fondo de Cultura Económica), 439-460.
- シャモワゾー、パトリック、ラファエル・コンフィアン
1995 『クレオールとは何か』西谷修訳 平凡社。
- ファノン、フランツ
1998 『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武・加藤晴久訳 みすず書房。

14) 『上の狐と下の狐』への端緒的取り組みは、拙稿 [1994 : 1997 : 2001] においておこなっている。

- ファーヴル、アンリ
 2002 『インディヘニスモ—ラテンアメリカ先住民擁護運動の歴史—』 染田秀藤訳
 白水社。
- Fuenzalida, Fernando
 1975 Poder, etnia y estratificación social en el Perú rural. En José Matos Mar, *et. al.*, *Perú, hoy*.
 México, D.F. : Siglo Veintiuno Editores, 8 - 86.
- 複数文化研究会編
 1998 『<複数文化>のために—ポストコロニアリズムとクレオール性の現在—』 人文書院。
- 後藤雄介
 1994 「インディヘニスモから『メスティサヘ』へ—ホセ・マリーア・アルゲダスのペルー
 社会像—」 『イベロアメリカ研究』 16 (1) : 45 - 58。
 1996 「ペルー・インディヘニスモ再考—『メスティサヘ』の視点から—」 『ラテンアメリカ
 研究年報』 (16) : 34 - 59。
 1997 「ラテンアメリカ『混血』論研究序説—統合と多元の狭間の『メスティサヘ』—」
 (一橋大学大学院社会学研究科1996年度博士課程単位修得論文)。
 1998 「混血文化論をめぐる一考察—『メスティサヘ』の位置づけを手がかりに—」 『論集』
 (青山学院大学) (39) : 1 - 9。
 2001 「アルゲダス研究の現在性—ポストコロニアルの視点から—」 『学術研究—外国語・
 外国文化編—』 (早稲田大学教育学部) (50) : 45 - 58。
- 今福龍太
 1991 『クレオール主義』 青土社。
- イナミネ、フアン・ハルオ、山脇千賀子
 1995 「ペルー人とはなにか—その起源・アイデンティティ・国民性—」 中川文雄・三田千
 代子編『ラテンアメリカ—人と社会—』 ラテンアメリカ・シリーズ 4 新評論、57
 - 84。
- López Soria, José Ignacio, ed.
 1981 *El pensamiento fascista*. Lima : Mosca Azul Editores.
- Méndez, Cecilia
 1993 *Incas sí, indios no : apuntes para el estudio del nacionalismo criollo en el Perú*. Lima : IEP
 (Instituto de Estudios Peruanos) .
- Oboler, Suzanne
 1996 *El mundo es racista y ajeno : orgullo y prejuicio en la sociedad limeño contemporánea*.
 Lima : IEP.
- 小倉英敬
 1999 「1980年代のアンデス・ユートピア論に関する一考察—ペルー現代思想史の視点から
 見た評価—」 『地域研究論集』 (国立民族学博物館地域研究企画交流センター) 2
 (1) : 117 - 140。
 2000 『封殺された対話—ペルー日本大使公邸占拠事件再考—』 平凡社。
 2002 『アンデスからの曙光—マリアテギ論集—』 現代企画室。
- Riva Agüero, José de la
 1955 *Paisajes peruanos*. Lima : Imprenta Santa María.
 1962 El Inca Garcilaso de la Vega. En *Obras completas, II*. Lima : Pontificia Universidad Católica
 del Perú.
- 鈴木茂
 1993 「『人種デモクラシー』とブラジル社会」 中嶋嶺雄・清水透編『転換期としての現代
 世界—地域から何が見えるか—』 国際書院、261 - 281。
 1999a 「語り始めた人種—ラテンアメリカ社会における人種と民族—」 清水透編
 『ラテンアメリカ—統合圧力と拡散エネルギー—』 <南>から見た世界 5 大月書店、
 39 - 66。
 1999b 「政治化する『人種』と官製多文化主義—ブラジルにおけるナショナリズムと多人種・
 多文化性—」 『神奈川大学評論』 (33) : 45 - 53。
- 辻内鏡人
 2001 『現代アメリカの政治文化—多文化主義とポストコロニアリズムの交錯—』
 ミネルヴァ書房。

後藤 第1章 クリオージョ、インディオ、メステイーン

Valcárcel, Luis E.

1939 *Garcilaso el Inca : visto desde el ángulo indio*. Lima : Imprenta del Museo Nacional.

バルガス=ジョサ, マリオ

1979 『ラ・カテドラルでの対話』 桑名一博・野谷文昭訳 集英社。

Westphalen, Yolanda

2001 *La mirada de Zavalita hoy : ¿en qué momento se jodió el Perú?* En Santiago López Maguiña, et. al., eds., *Estudios culturales : discursos, poderes, pulsiones*. Lima : Red para el Desarrollo de las Ciencias Sociales en el Perú.